

令和元年度 きのさき見て歩き 第2回

「新しい城崎の動き」

実施日 2019年9月2日(月) 9:30~12:00

講師 坂田 文一郎氏 (城崎文化協会会長)

<城崎文芸館>

今回のテーマは「新しい城崎の動き」。志賀直哉以降あまり動きのなかった城崎の文学に「志賀直哉来湯百周年記念事業」以来新しい動きが起こっている。

今年で開館24年目を迎えた城崎文芸館では、城崎旅館の若旦那衆「城崎温泉旅館経営研究会」が立ち上げた城崎温泉でしか買えない本を出版する「本と温泉」についてお伺いした。

・企画展示

文芸館1階では企画展を行っており、内容は1年に2度のペースで変更される。現在は第4回「本と温泉」のつくり方。城崎温泉でしか買えない特別な本づくりの裏側を紹介している。

『城の崎にて／注釈・城の崎にて』 江口 宏志

現代版『城の崎にて』をイメージして出版された。城崎旅館の若旦那たちの尽力で出版されるに至った最初の文学である。サイズは非常に小さく2冊組となっている。温泉かごに入れやすく、手に持って歩けるように工夫されている。



『城崎裁判』 万城目 学

ブックディレクターの幅允孝さんが万城目学さんに直接執筆を依頼した。万城目さんは城崎でしか買えない特別な本の出版に感銘を受け執筆を引き受けられたという。本の装丁は温泉仕様となっている。

ブックカバー代わりにタオルが巻かれ、ページにはストーンペーパーという水に強い紙が使われている。

『城崎へかえる』 湊 かなえ

雑誌での湊さんと万城目さんによる対談が執筆のきっかけとなった。毎年冬に城崎を訪れる湊さんは、自分も城崎文学に関わりたいたいと思っていたという。

本の装丁は城崎名物の蟹の脚。特殊なテクスチャー印刷という方法によって、本物の蟹を触っているかのような質感をつくりだしている。できるのは日本でも3社のみという貴重な技術だという。

『? (未定)』 tupera tupera

絵本作家、tupera tupera さんによる図書が2019年内予定。



・二世会紹介コーナー

城崎温泉旅館経営研究会（二世会）の主要メンバーの紹介コーナー。

何か面白い紹介の仕方はないかと考えたところ、それぞれに人生を変えた本との出会いを交えながら自己紹介をしてもらったという。

・ボールプールコーナー

ボールプールに入り写真撮影が行える。また、浸かりながら本を読むこともできる。

実際に入ってみるとひんやりして気持ちがよかった。

訪れた人はぜひ一度入ってみてほしい。



・日本地図コーナー

観光客の方が自分の住んでいる地域にピンを指して帰られる。見ると日本全国から城崎に人が訪れていることが分かる。

・志賀直哉と城崎温泉、そして白樺派

常設展となっており、志賀直哉や白樺派の作家たちがどのように城崎の町や人と関わったのか本や書簡を通じて紹介されている。

志賀直哉は大正2年、病氣療養のため3週間城崎に滞在していた。それ以降生涯で10回以上城崎へ訪れている。有島武郎、武者小路実篤などの多くの白樺派の友人を城崎へ誘っていた。中でも武者小路実篤とは心を許しあい、お互いに影響しあった盟友だという。

白樺派…それぞれに路線の異なる文学だが、根底の部分では固く結ばれている。写実的で飾り気のない文学。

右の写真の掛け軸は志賀直哉直筆のもの。自分の名前の「哉」の字にこだわりがあり、全体のバランスが悪くならないよう気を配っていたという。

文学碑の設置に関しては、自分の価値は作品を読んでもらい決定されるものだと主張し、反対を申し出たという。現在城崎にある志賀直哉の文学碑は文芸館前に1つのみ。



<城崎国際アートセンター>



城崎国際アートセンターは、主に舞台芸術に特化したアーティスト・イン・レジデンスの拠点である。もともとは兵庫県が所有していた大会議館を豊岡市が譲り受け、2014年に改装オープンした。

内装は1つの大ホールと6つのスタジオ、22名が宿泊可能なレジデンス施設で構成されている。アーティストはここに3カ月間の滞在し、24時間の制作が可能となっている。滞在中の宿泊費、ホール、スタジオ使用料は全て無料となるが、かわりにワークショップや試演会の開催など地域交流活動を行ってもらっているという。

滞在アーティストは年一回の公募によって選ばれるが、現在では多くの応募があり狭き門となっているようだ。

今回は特別に大ホールで、平田オリザさんの指導による舞台稽古を見せていただいた。短い時間だったが場の緊張感と迫力のある演技に圧倒された。

豊岡市の政策とアートセンター事業について田口館長からおはなしをお伺いした。

豊岡は魅力的な町だが日本全国からの知名度は低く、人口は年々減少してきている。人口減少は豊岡に大学がないこと、そのために子どもたちが都会に出て帰ってきていないことが最大の要因に挙げられる。豊岡は子どもたちにとって就職し、新しいことにチャレンジする場所選ばれていないということである。子どもたちに選ばれる町になるため、豊岡は都会とは異なった固有なものが輝く町にならなければならない。そのための政策の1つが城崎国際アートセンター事業となっている。城崎は温泉街の伝統を大切にしながら、文芸館、アートセンターなどの文化芸術を取り入れ変わっていかなくてはならない。

豊岡市の未来構想への田口館長の意欲が伝わってきた。

その町に住んでいても、なかなか未来構想や政策について詳しく聞ける機会はない。

参加いただいた方の中にも、初めて知ることが多くて驚いたとの声があった。舞台稽古の見学も含め、とても貴重な体験ができた。



・大学の設立

人口減少対策の一環として、2021年には豊岡に国公立の専門職大学が創設される。学長は平田オリザさん。大学では、演劇や観光に関することが学べる。学内には図書館も設立される予定だという。